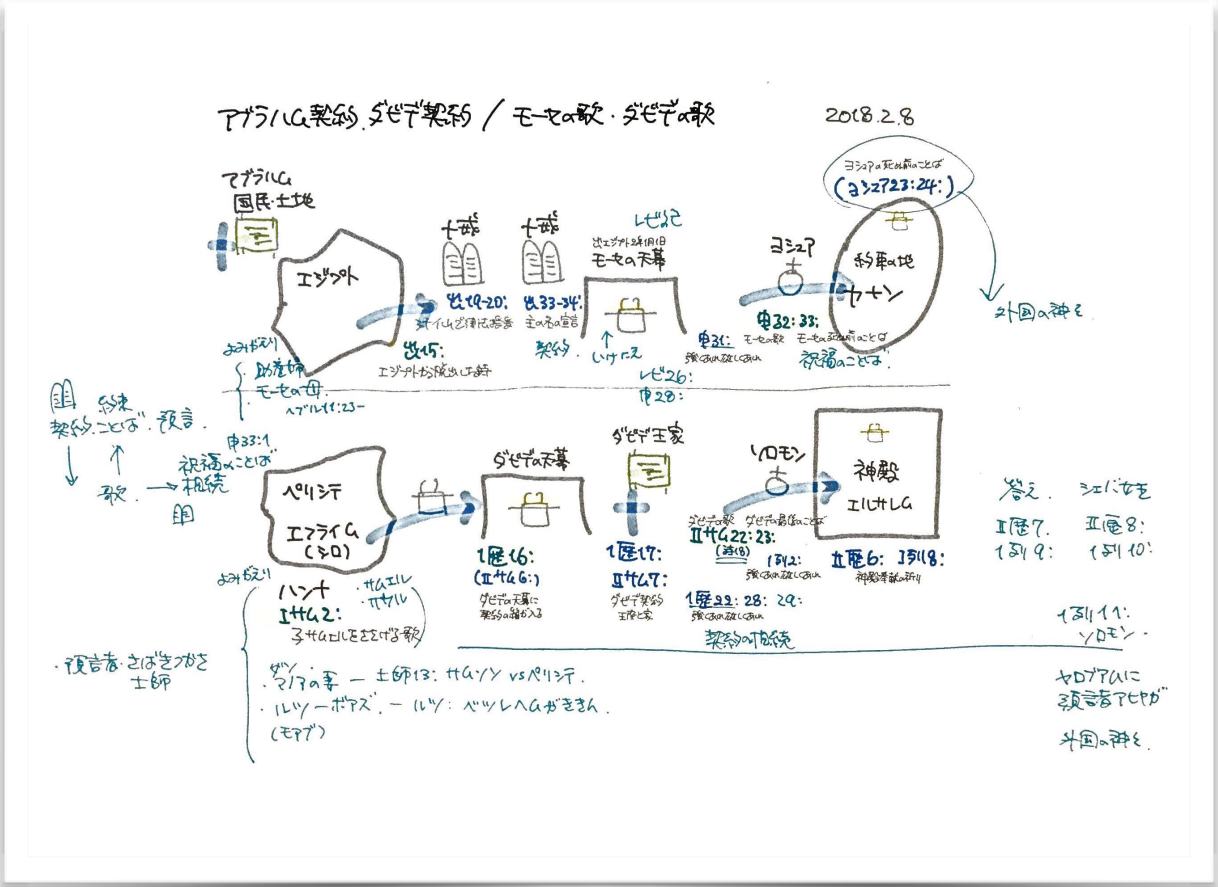
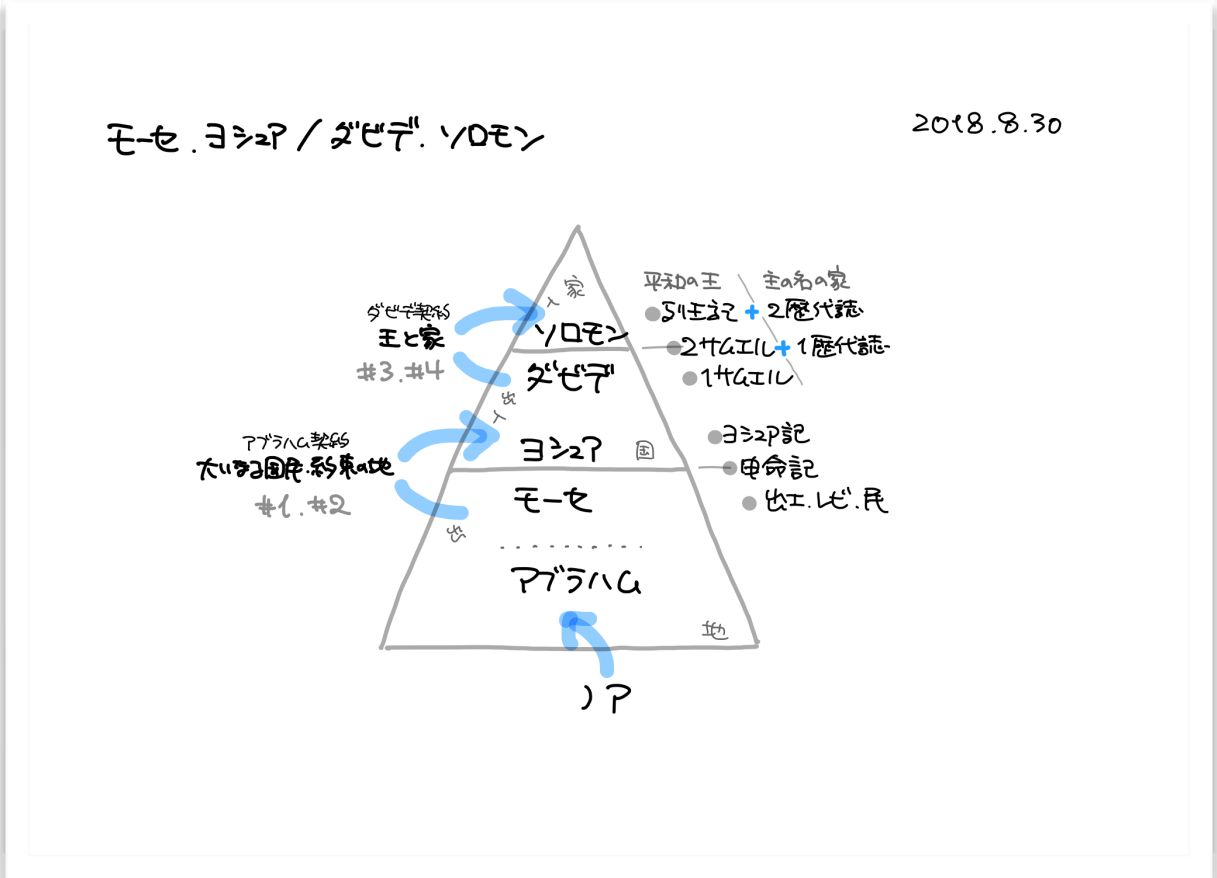
アブラハム契約・ダビデ契約



アブラハムの契約とダビデの契約ということで、アブラハムからカナンへ、古い幕屋から新しい神殿へ、というストーリーが、よく把握できていないと。似ているところがいろいろあるのですね。同じところが違う書物に出ていたり、アブラハムのところとダビデのところが似ていたり、それで出エジプト記15章がコレです。申命記32章がアレですと言われても混乱してしまうと。

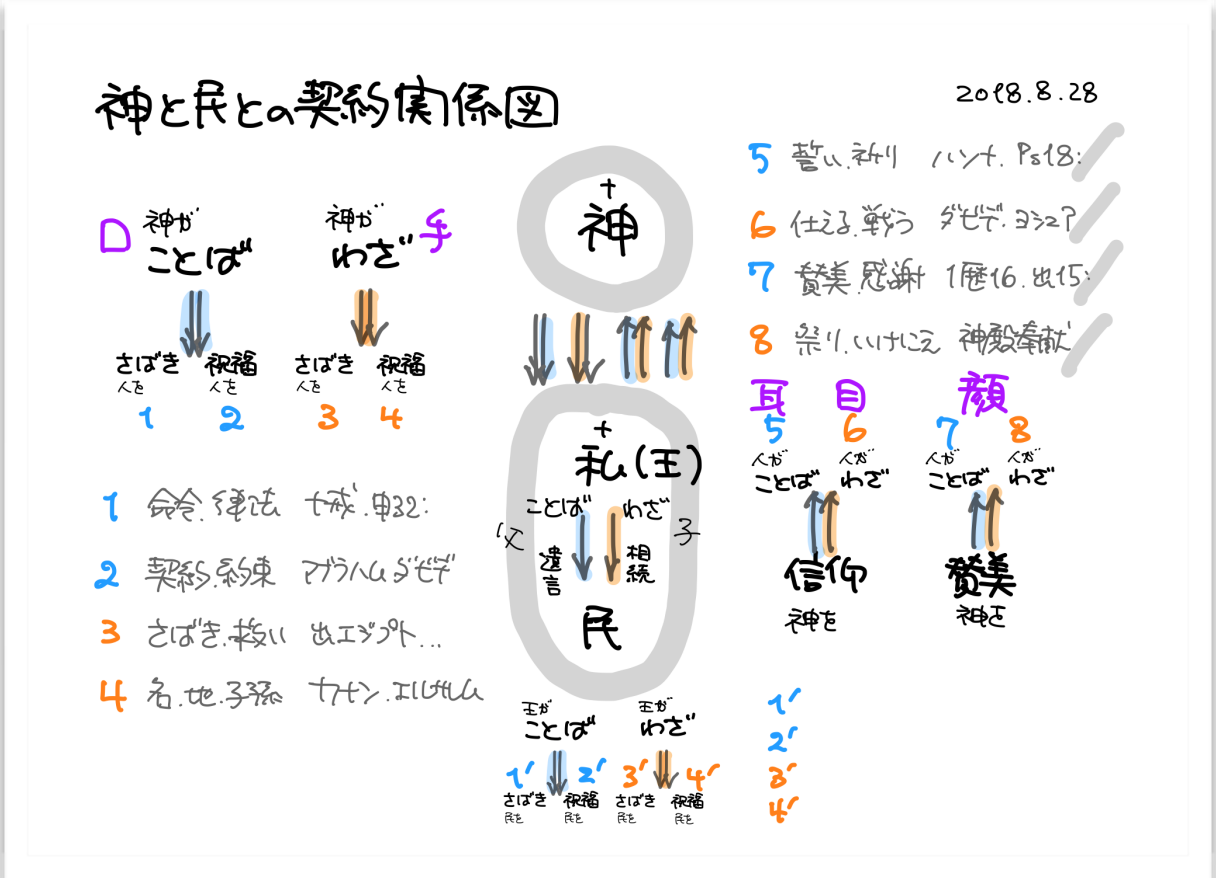
それがわかっていないと、詩篇の配列の概略を把握しようとしたときに困るということで、これ(アブラハム契約・ダビデ契約／モーセの歌・ダビデの歌の図)を見ています。

アブラハムの約束が成就するほうは、国が与えられる、土地が与えられるというストーリーです。ダビデのほうは、平和の君が来る、そして神様の神殿が建てられるという大きな流れがあるわけです。



3階層の絵で見てみるとわかるかと思います。(モーセ・ヨシュア／ダビデ・ソロモンの図)ノアが地球に戻ってきました。そして、アブラハムに約束が与えられます。国が与えられ、土地が与えられます。それで、モーセの時代に国が出来て、約束の地に入るのがヨシュアのときです。そのヨシュアのときのエフライムの天幕が腐ってしまって、新たな神殿が作られるというのが、ダビデの契約、王と家の契約、そして王と家が作られるソロモンのときということで、段階が地球が回復したあとに、国が来る、家が作られる。エデンの国が戻り、エデンの園が作られるという流れです。

モーセの時代にエジプトを出て約束の地に入る。ダビデのときに古い天幕が捨てられて、新しい家が作られる。出る、入る。出る、入るのところに、特に契約ですから、相続の約束を伝えるところがあるわけです。相続として与えてそれを受け継ぐという関係がありますので、特にここに、神様の約束や、神様のことばや、神様の祝福、それに対する民の祈り、感謝と賛美というようなところが、よく現れているだろう。



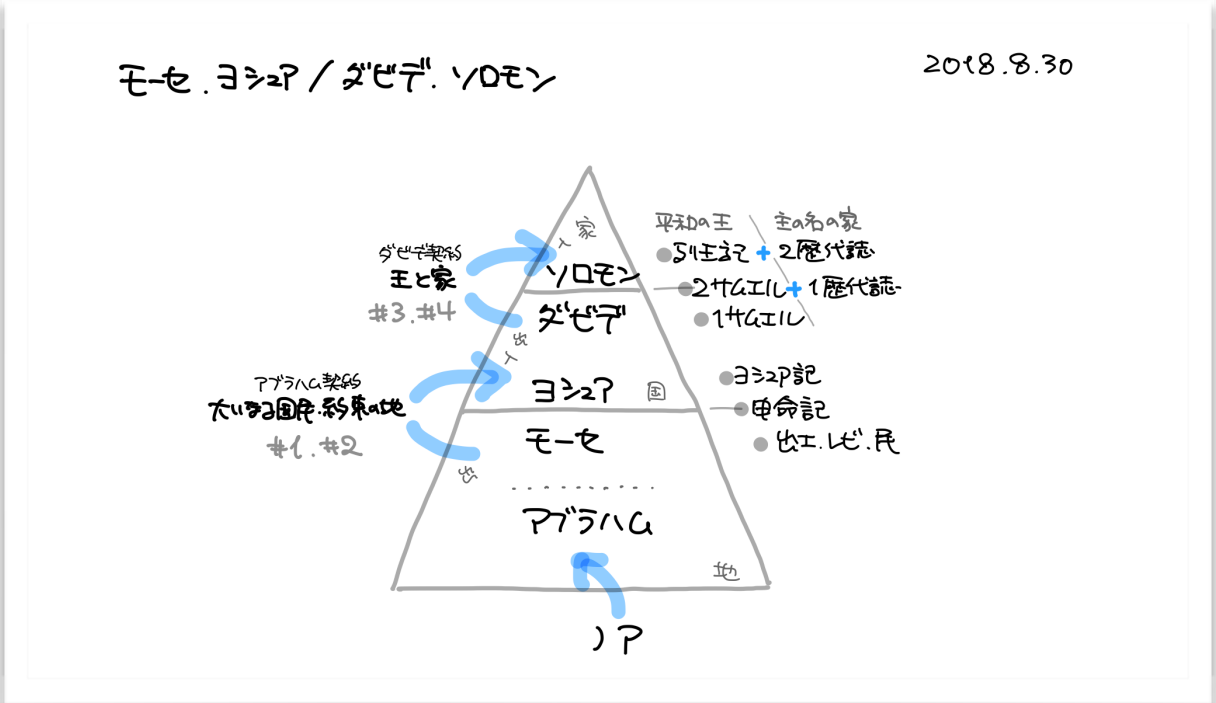
(神と民との契約関係図)もしくは、その神様から与えられる裁きのことば、命令、律法と約束、祝福のことばに対する、民の誓いや祈りということと、感謝と賛美と。このことばを中心にこの流れ(アブラハム契約・ダビデ契約／モーセの歌・ダビデの歌の図)を把握して、その中での歌の役割、約束の役割というものを把握しておくと、詩篇全体がことばが与えられ、ことばで答えているものですので、その編集構造と神様の導かれた歴史が一致しているというのがわかるだろうということでやっています。

特に混乱するところというのが、第1歴代誌、サムエル記、列王記が、同じ歴史のところを話していますので、そこがわかりにくいかなと思います。

(モーセ・ヨシュア／ダビデ・ソロモンの図)モーセのところからヨシュアのところ。モーセは出るときは、特に出エジプト記、レビ記、民数記。そして境目のところの申命記は、いよいよ次の段階にいきますよということですので、境目の話だという意味でこの線がついているところに申命記があります。そして入ったところにヨシュア記があります。

サムエル記、歴代誌、列王記なのですけれど、サムエル記の第1は、ダビデが王になっている、次の時代のリーダーが来るよということなのですけれど、第2サムエル記のところで、約束が与えられ、王と家の話が出てくるわけですね。天幕を作るのも第2サムエル記です。ですから、ダビデからソロモンへ、ダビデの契約の約束が成就するための境目のところは、第2サムエルにあります。そして、ソロモンがそれを成就するところは、列王記のほうに変わっていくわけです。モーセのときは、アブラハムに約束が与えられて、それが成就する形になっています。

ダビデのときは、逆ですね。ダビデ側が家を作りたいと言ったら、それに対して答えるという、順番が逆になっているところも興味深いところです。そのダビデの家を捧げるというところと、ソロモンが受け継ぐところが、第2サムエル記に書かれています。ちょうど申命記のような感じです。相続の部分です。その部分が歴代誌と被っています。第2サムエル記と第1歴代誌のところを一緒に見ないといけない。そして、第2歴代誌と列王記を一緒に見ないといけないというような形なので、1と2(歴代誌)と2(サムエル)と1(列王記)。(この1は)第1列王記ですからね。それが特に、1とか2とかもついているので、混乱しているなというところなのですが、1と2の食い違いを…。ここが第1列王記ですからね。そこを思い出す時に混乱するなと思うところです。



もう一度これを書き直すつもりですけれど、この大きな流れですね、出て、入る、出て、入る。ダビデ、ソロモンのところは、王と家の約束ですよね。平和の君が来るというほうが、こちら王ですね。主の家が建てられるというのが、歴代誌のほうです。約束の成就というのが、2つの大きな流れの中であらわされているのだろうと考えています。それと、また段階が上がっていくわけですけれど、エジプトから出てカナンに入るというほうは、十戒でいうと、1番目と2番目。ダビデからソロモンへは、十戒でいうと、3番目と4番目というところが、おもな強調点なのだろうと。モーセからヨシュアへといったときは、主のみがエジプトから連れ出した主である。他の神々と戦ってその神々に仕えるなということが、ヨシュア記は1番で始まって、2番で終わるような書物だったりしますので、1番、2番の戦いですね。ダビデ、ソロモンのところは、主の名をほめたたえる、そうすると本物の安息の家が建てられるということで、平和の君が来て、主の名の家を建てる。そうすると、安息の国になるという意味で、平和の王が来るほうが、4番目で、主の名の家のほうが3番目というものかなと思います。十戒の大きな神様の約束、命令。この戒めを守るならば、アブラハムへの約束、ダビデへの約束が成就するという全体の流れになっていると思われます。